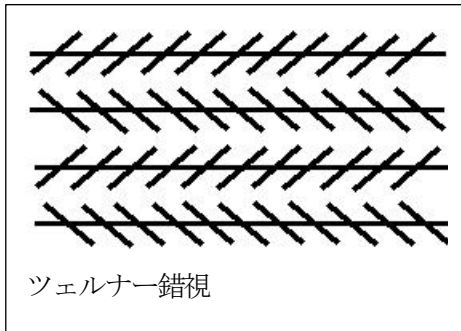


Lesson 1 Potential Uses of Optical Illusions

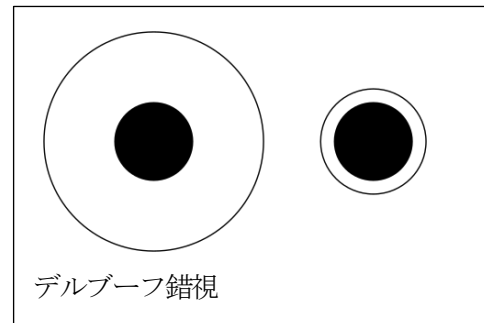
■さまざまな錯視

Lesson 1 ではさまざまな錯視が紹介され、またそれらが日常生活の中で、どのように利用されているかがテーマになっています。錯視については専門に研究している科学者も多く、さまざまな錯視が今までに作られています。まずは教科書に取り上げられたもの以外の、有名な錯視をいくつか見てみましょう。



左の図はツェルナー錯視と呼ばれるものです。図中の4本の線分はすべて平行ですが、角度がついているように見えます。なお、線分に交わっている「羽」の角度が鈍角であればあるほど、錯覚はより顕著になります。このような錯視を総称して、「方位の錯視」と呼びます。

次は、デルブーフ錯視です。2つの黒い円は合同ですが、片方には外に大きな同心円、もう一方には外に小さな同心円を描くと、中の黒い円の大きさも違って見えます。外側の同心円の大小が極端であればあるほど、錯視も顕著になります。また応用として、円以外の図形、たとえば多角形などでも同様の錯覚が発生します。



続いてはカニッツァの三角形です。名前は研究を行ったイタリアの心理学者に由来しています。中央に、実際には存在しないはずの三角形が見えますね。

最後は、フレイザー錯視です。錯視の研究で知られるイギリスの心理学者、ジェイムズ・フレイザーが1908年に発表しました。渦巻きのように見えますが、実際には複数の同心円です。曲線を指でなぞって確認してみてください。

